

研修報告書 No 4

岡山中央病院 井上温子

研修施設：四万十町国保大正診療所

2011年8月22日から9月2日まで高知県四万十町国保大正診療所で地域医療研修をさせて頂いた。

私は乳児期に高知県越知町に住んでいたが、その頃の記憶はなく、その後は大学まで神戸で育ち、実際に田舎を経験したことはほとんどなかった。大学は沖縄の琉球大学へ進学し、在学中に離島の診療所を訪ねたことはあった。私が訪ねたいいくつかの診療所は、医師は1名、検査器具・薬品も必要最低限しか置いておらず、診療所で対処できなければへりを要請できるが、そうでなければ全て一人で診なければならず、へき地医療といえども孤独で過酷な印象を持っていた。

今回、四万十町国保大正診療所で研修させて頂くことになり、前述した離島の診療所を思い浮かべながら高知県へ車を走らせた。高知市はまだ街であったが、徐々に田舎の景色になり、須崎、七子峠、中土佐と進むに連れ、四万十川を併走しながら段々とももの寂しい心持になった。ようやく着いた診療所は、想像していたよりも遥に大きく、新しく、綺麗で失礼ではあるがとても驚いた。施設の説明を受け、入院施設があること、なんとCTがあり放射線技師が常勤でいることを聞き、設備が整っていることにとっても驚いた。

研修は、午前中は外来、午後はカンファレンスや施設訪問や往診、外来といったスケジュールであった。2名いる常勤の先生の1名が病気で休職中のため、他院から日替わりで医師が応援に来られていた。更に、もう1人の先生も週途中から1週間の休暇に入られたため、その間は応援の先生方だけで外来と入院患者さんを診られていた。医師手薄の時期に研修となってしまう残念に思ったが、そのお陰で高知県のへき地医療のサポート体制、へき地の医師がいかに大変な条件（肉体的、精神的）で働いているか身をもって実感できた。そして、応援に来られている先生方それぞれから地域医療に対する思い、将来への展望などが聞けてとても有意義だった。高知県では、病気や休暇の際は休みがとれるようにする（人的サポート）、都市の病院にコンサルトできるようにインターネット回線を整備する（知的サポート）、対処不能な場合はへりを要請できる（空間的サポート）、などサポート体制を少しずつ整えてきているとのことであった。他の県の体制を知らないのでもなんとも言えないが、へき地で働く医師の負担を少しでも軽減しようという思いがとても感じられた。

働き始めて今までは都市部の総合病院で働いており、急性期の治療が終わり、かかりつけの先生のところへお返しした後のことについてはほとんど考えたことがなかったが、今回の研修では地域に帰ったその後が見ることができ、とても勉強になった。大正国保診療所では、地域の介入が必要な患者さんの検討会が週に1回行われていた。診療所へ入院されている患者さんだけでなく、外来通院の患者さんなどについても地域医療に関する他職種のスタッフ（ソーシャルワーカー、施設職員等）が参加され、今後どういった医療介入をしていくかなどについて、患者さんだけでなく、家族・親戚の性格、今までの暮らしぶり、経済状況などを考慮して、そ

の上で患者さんに一番いい方法が話し合われていた。地域一丸となって問題に取り組まれていた。しかし、地域も高齢化の進行によりサービスの担い手も少なく、必ずしも一番の医療を提供できないことを目の当たりにし、医療の難しさを実感した。

今回、高知県の大正国保診療所で研修させて頂き、地域で医療するという事は、都市部とは異なる課題が多くあるということが身を持って体験でき、貴重な研修となったように思う。今後もしばらくは街中の総合病院で働くことになると思うが、以前は具体的にイメージできなかった地域に帰った後の事も考えながら診療を進めていけると思う。今回学んだことを忘れぬよう、日々の医療に生かしていきたい。